

3月に入り、やわらかな日差しが心地よく感じられる季節になりましたが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？今回は緩和ケアのさまざまな症状に使用する「ステロイド」についてお伝えしたいと思います。

緩和ケアにおいてステロイドの適応となる症状は多岐にわたります(表1)。進行・終末期になってくると、がん患者は複数の症状に同時に悩まされることが多く、症状が互いに悪循環して相乗的に苦痛が増します。このような場合でもステロイドの複数の作用メカニズムが好循環のきっかけとなり、一気にQOLの改善が得られることが多いと言われています。困った時でもステロイドで「調子がいい」状態になることがあります。なかなか症状緩和が得られず困った時には医師に相談し、一度ステロイドを試してみましょう。

表1: 緩和ケアにおけるステロイドの適応

悪液質症候群	食欲不振、全身倦怠感
痛み	骨転移痛、がん性疼痛全般
呼吸器症状	気道狭窄と、がん性リンパ管症、がん性腹膜炎、上大静脈症候群
消化器症状	消化管閉塞、がん性腹膜炎(便秘)、悪心・嘔吐
抗浮腫療法	頭蓋内圧亢進症状、脊髄圧迫、リンパ浮腫、閉塞性の腎障害、腸管の浮腫軽減、肝腫大の軽減など
その他	腫瘍熱、高カルシウム血症



緩和ケアにおけるステロイドの効果は①局所症状、②全身症状に対する効果の2つに分けて考えることができます。

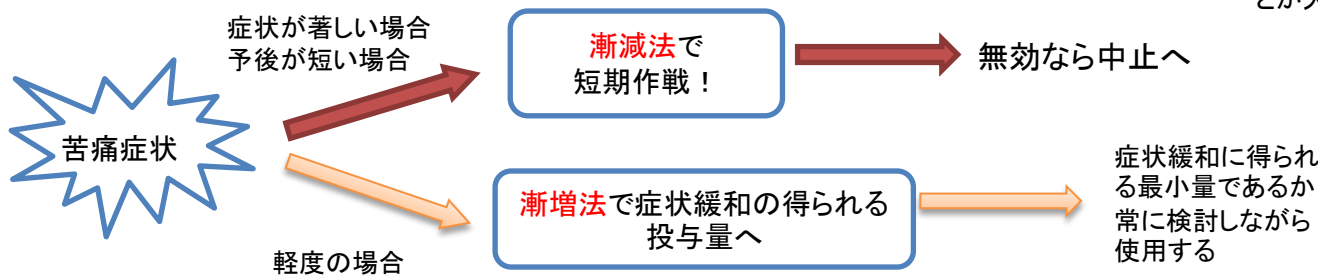
①局所症状に対する効果

腫瘍周囲の炎症や浮腫を改善し、腫瘍の組織への圧迫による症状を改善します。

②全身症状に対する効果

ほとんどすべての進行・終末期がん患者は、倦怠感と食欲不振を経験します。ステロイドは悪液質症候群に伴う倦怠感や食欲不振の改善に効果を発揮します。これは、サイトカインの産生抑制などによるものと考えられています。

ステロイドの具体的な投与方法



困ったときのステロイド！副作用を回避するポイントをつかんで、ステロイドを症状緩和の大きな味方につけましょう！



ステロイド投与中のケアのポイント

- 鎮痛効果の評価
 - ステロイドの投与量の変化に応じた痛みの変化をアセスメントする
- 早期から注意する副作用
 - ・高血糖→ 耐糖能異常の病歴を問診し、見逃さない血糖をチェックする
 - ・精神症状→ 不眠、興奮、せん妄を見逃さない
特に、せん妄のリスク因子(薬剤性せん妄の既往、高齢、脳血管障害の既往、脳転移、認知症など)がある患者に注意する
- 長期投与になる場合に注意する副作用
 - ・口腔カンジダ症→ 口腔内の保清と保湿を心がける
常に口腔内を観察し、徴候を見逃さない
 - ・満月様顔貌→ 長期投与となる場合は、あらかじめ患者に説明し、気にしている場合は対応を検討する
 - ・ステロイドミオパチー→ 高用量の場合、念頭においておく

参考・引用文献:ここが知りたかった緩和ケア 余宮 きのみ

ステロイドがどれくらいの量で効くかということはあらかじめ予想することができません。実際には余命や苦痛の度合い、腫瘍浸潤の状況、耐糖能異常、せん妄のリスクなど総合的に判断して決めることとなります。チームで話し合ってみることが大切です。